

原 著

## 過去の祖父母機能が大学生の心理的発達と 高齢者イメージに及ぼす影響

福江里美\*<sup>1</sup> 福岡欣治\*<sup>2</sup> 荒井佐和子\*<sup>2</sup>

### 要 約

本研究では、孫が中学卒業以前に祖父母が果たしていた機能が、青年期後期に及ぼす発達の影響を検討した。質問紙調査の参加者は大学生267名であった。参加者は自身の成長にあたりもっとも影響を受けたと感じる祖父母1名を指名し、中学卒業以前および現在の祖父母との接触頻度、中学卒業までの祖父母の機能、祖父母と両親との関係、心理的発達の指標としての現在の自我同一性の達成度と自尊感情、および高齢者一般に対するイメージに回答した。祖父母の属性のうち「中学卒業までの祖父母との接触頻度」および「祖父母と両親の関係」が特に多くの変数と関連しており、その後の分析で統制変数として扱われた。階層的重回帰分析により、心理的発達および高齢者イメージの各変数に対する4つの祖父母機能の影響が検討された。その結果、祖父母の「時間的展望促進機能」が、自我同一性、自尊感情、および高齢者イメージの「円熟性」と「統合・柔軟性」に対して正の影響を及ぼしていた。また、祖父母の「存在受容機能」が、高齢者イメージの「統合・柔軟性」と「能動性」に、それぞれ正の影響を及ぼしていた。これらの結果は、中学卒業以前の祖父母の機能が、青年期後期における孫の心理的発達と高齢者イメージの双方に対して正の影響を与えることを示唆している。

### 1. 緒言

#### 1.1 はじめに

現在の日本においては、祖父母と孫との交流は、一般に頻繁とは言えない。例えば、内閣府の令和元年度版高齢社会白書<sup>1)</sup>によると、1980年には50.1%とほぼ半数を占めていた三世同居率は、2017年には11.0%にまで減少している。特に大学生においては、親元を離れて生活するケースも増え、それ以前よりもいっそう、祖父母との交流頻度は減少すると考えられる。祖父母側の視点からは、両親の代わりに愛情を注いだり孫と親の緩衝材になる等の祖父母役割<sup>2)</sup>や、自身が生きているうちに自分の理念を残すという「祖父母的世代継承性」<sup>3)</sup>の指摘もなされているとはいえ、それらを容易には実現させるべくする状況があると考えられる。

他方、女性の就労率上昇や共働き家庭の増加に伴って、祖父母には、親の子育てを支援するという点でも重要な役割があるとされてきた。厚生労働省<sup>4)</sup>

は、核家族化や地域のつながりの希薄化を背景とする「子育てに対する支え」の不足が少子化を助長しているという問題意識の下で、高齢者の活力を生かすことが大切であるとしている。江口<sup>5)</sup>も同様に、祖父母による子育てに対する支援の力が見直されてきていること、平均寿命の延長に伴って「祖父母としての期間」が長くなり、社会に貢献できる高齢者の「祖父母力の活用」が社会的に必要とされていることを述べている。

本研究では、このような社会的状況に対する認識の下、青年期の孫にとって祖父母が果たす役割(祖父母の機能)について検討する。

#### 1.2 祖父母が孫に果たす機能

従来より、発達心理学においては、孫の発達に対する祖父母の影響の可能性が指摘されてきた。例えばBaranowski<sup>6)</sup>は、エリクソンが定式化した青年期の発達課題である自我同一性の確立<sup>7)</sup>を孫が実現するうえで、祖父母が有意義な影響を及ぼしうること

\*1 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 臨床心理学専攻  
(※2020年4月以降の所属：国立長寿医療研究センター)

\*2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科  
(連絡先) 福岡欣治 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学  
E-mail: fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp

とを指摘している。Baranowski<sup>6)</sup>がこの文脈で特に強調するのは「連続性 (continuity)」であり、これがエリクソンのアイデンティティ概念の中核であるという。Baranowski<sup>6)</sup>は高齢者を一種の教育者とみなす Mead<sup>8)</sup>にもとづき、祖父母は他のどの世代よりも多くの変化を経験しそれに適応してきたという点で、青年にとって過去・現在・未来をつなぎうる存在であるという。

高齢者が青年の発達にとって「連続性」の観点から重要な存在であるという議論は、祖父母が孫に果たす心理的機能に関する日本での先行研究にも引き継がれている。例えば田畑ら<sup>9)</sup>は「孫—祖父母関係評価尺度」を作成し、「存在受容」「日常的・情緒的援助」「時間的展望促進」「世代継承性促進」の4つを、「孫からみた祖父母の機能」として抽出している。このうち、存在受容機能や日常的・情緒的援助機能はその時点で支えとなるものであるが、時間的展望促進や世代継承性促進機能は、歴史の伝達や人生への考察を通じて未来への展望を与え、また家族と自分との連続性に気づかせることを通して、より長期的に影響を与えうるものである。なお、森下と上田<sup>10)</sup>は女子大学生を対象にした調査で、田畑ら<sup>9)</sup>を参考にした尺度で測定した祖父母機能（心の支え、人生の指針、理解共感）の多くが、同居・別居の別を問わず、孫の自尊感情や自己受容と正の相関をもっていたことを報告している。田畑ら<sup>9)</sup>や森下と上田<sup>10)</sup>、およびそれに先立つ Baranowski<sup>6)</sup>などの先行研究をふまえると、三世代同居率が減少している現代においても、祖父母の存在が、孫の自我同一性、自尊感情といった心理的発達の面に影響を与えている可能性があると考えられる。ただし、この問題に対する従来の研究の蓄積は決して多くはない。

### 1.3 高齢者イメージ

祖父母と孫の関係が希薄化する一方で、日本における高齢化率は年々高まっている。65歳以上の人口比は、1980年には9.1%であったが、その後も上昇を続け、2018年10月には28.1%に達している<sup>1)</sup>。そのような中、平均寿命が延び元気な高齢者も増えていることから、高齢者の社会参加や他世代との交流（世代間交流）が重要視されるようになった<sup>4,11)</sup>。

高齢者の比率が高まり、他世代との交流促進が望まれるという社会状況は、それ以前から行われてきた若年者的高齢者イメージに関する研究（例えば Koyano<sup>12)</sup>）の重要性をいっそう大きくしていると考えられる。なぜなら、良好な高齢者イメージは、若年者が高齢者と積極的な関わりをもつことにつながると考えられるからである。Baranowski<sup>6)</sup>は、祖

父母との関係がもつ有意義な効果の1つとして「加齢や高齢者に対する態度」を挙げており、これが高齢者にとっての受容的・支持的な社会環境をもたらすとともに、青年にとっても加齢後の自己概念や生活満足度に影響しうることを指摘している。

なお、高齢者イメージへの影響要因の1つに「祖父母や他的高齢者との接触」が指摘されている（例えば Palmore<sup>13)</sup>、大谷と松木<sup>14)</sup>）。ただし、祖父母との同居・別居は高齢者イメージと明瞭な関連がなく、祖父母との会話や思い出、特定の経験（支援を受ける等）が関連していたことが報告されている<sup>15-17)</sup>。また久世<sup>18)</sup>や松山ら<sup>19)</sup>は大学生あるいは専門学校生徒を対象に調査を行い、児童期以前の祖父母との接触経験が高齢者への評価ないしイメージと関連していたことを報告している。なお、Baranowski<sup>6)</sup>は接触の頻度以上にその質が重要であることを指摘しており、ここでも祖父母の果たす機能の重要性が推測される。しかし、従来の研究では、祖父母の続柄（父方・母方、祖父・祖母）の違いに着目した前原ら<sup>20)</sup>を含め、祖父母の機能と高齢者イメージとの関連は検討されていない。

### 1.4 過去の祖父母機能への注目

祖父母の機能に関する従来の研究では、大抵の場合、調査時点で存命の祖父母について、自分にとってどのような人であるかの回答が求められている<sup>9,10)</sup>。しかし、たとえば祖父母が支援的であったとしても、実際に接触をもっていない場合、「現在の」祖父母との関係や祖父母が果たしてくれる機能を的確に表しているとは言えない。この点に関連する示唆的な知見として、福江ら<sup>21)</sup>は、大学生を対象に、自身ももっとも関わりの深い、または深かった祖父母1名を存命・死別を問わず選択させ、その祖父母について、田畑ら<sup>9)</sup>に近い項目により「導き」「気遣い」「世代的つながり」などの機能をたずねた。その結果、有効回答者の4分の3以上が現時点で別居の祖父母を、また1割強が死別した祖父母を挙げる一方、祖父母の機能については祖父母との同別居や存命・死別による違いがみられなかったことを報告している。この結果より、祖父母との現実の関わりが希薄になったり、あるいは死別等によって失われているとしても、回答者によって想起される過去の祖父母との関わりは、孫にとって一定の影響を及ぼす可能性があると考えられる。

なお、前述の森下と上田<sup>10)</sup>は「一番かわりのある」祖父母を1名挙げさせて祖父母の機能をたずね、同別居を「同居」「過去の同居」「別居」に分けて把握したうえで自己受容や自尊感情との関連を検討している。この場合、祖父母の機能は必ずしも現時点

で発揮されているものとは限らず、過去に果たされていた機能の回想（以前そのようにしてくれていたこと）を含めて把握されている可能性が考えられる。

### 1.5 本研究の視点と目的

以上の問題意識をふまえ、本研究では、大学生における過去の祖父母との関わりに着目し、回答者が過去に経験したと認知する祖父母の機能が、青年期後期を迎える大学生に及ぼす肯定的効果の可能性を検討する。特に本研究では、祖父母との関わりの期間として青年期の前期から中期に差し掛かる中学校卒業以前の時期に注目し、また祖父母の機能が果たす肯定的効果として、回答者自身の心理的発達と一般的な高齢者イメージの2側面を取り上げる。

本研究において祖父母との関わりの時期として「中学校卒業以前」に注目する理由は、青年期後期にかけて自我同一性の確立という新たな発達課題への取り組みがおこなわれることから、心理的発達に対する祖父母の重要性を検討するのに相応しいと考えられるためである。加えて、義務教育である中学校卒業以前とそれ以降とは活動範囲が異なり、特に大学生では親元を離れるケースも少なくないことから、中学校卒業以前の方が祖父母との関わりが多く、また祖父母が存命である可能性もいっそう高いと考えられることによる。

この問題意識の下で、本研究ではまず、心理的発達として自我同一性および自尊感情を扱う。前者は孫の発達に対する祖父母の存在意義として従来から考察されてきた側面であり、後者は実際に一部の研究で検討されてきた変数である。これらを取り上げることより、祖父母との関係が希薄となりがちな現代においても、祖父母との関わりが孫の心理的発達にとってなおも有意義なものであるかどうかを検証する。加えて、中学校卒業以前の祖父母の機能が、自身の祖父母との関係を越えて、身近な存在である高齢社会における高齢者一般に対する現時点での良好なイメージと関連するかどうかを検討する。これにより、祖父母とのかかわりが、世代間交流の促進のためにも有意義であり得るかどうかを検討する。

なお、上記の問題を検討するにあたり、本研究では剰余変数を統制する。特に高齢者イメージについては、祖父母との接触経験の影響が指摘されてきた。また、奥村と久世<sup>22)</sup>は、両親が祖父母に思いやりを持って接していた場合や祖父母が両親に思いやりを持って接していた場合に、孫の高齢者イメージの良さにつながっていたことを報告している。祖父母の機能に関する従来の研究では明示的に扱われていないが、本研究では祖父母の機能が果たす独自の貢献に着目するという視点から、これらの変数を積極的

に統制し、大学生の心理的発達および高齢者イメージに対する影響を検討する。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象者

岡山県内の大学に所属している19歳から24歳までの学生337名を対象に調査を行った。そのうち、記入内容に不備のあったものを除いた267名を分析対象とした。対象者の学年は1年生が85名、2年生以上が182名、年齢は18歳が36名、19歳が117名、20歳以上が114名、性別は男性が63名、女性が204名であった。

### 2.2 測定内容

#### 2.2.1 もっとも影響を受けたと感じている祖父母

回答者に自身の成長にあたってもっとも影響を受けたと感じている祖父母を1名挙げてもらい、その祖父母について、存命、同居もしくは別居、祖父母と会う頻度についてたずねた。祖父母は、父方と母方の祖父母計4名の中から1名選択してもらった。その祖父母の存命については、「1. 元気に暮らしている」「2. 元気とは言えないが、存命である」「3. 現在は亡くなっている」の3つから選んでもらった。同居もしくは別居については、「1. 同居」「2. 近居（歩いて行ける、30分～1時間程度）」「3. 遠居（1～2時間程度、それ以上）」「4. その他」の4つから選んでもらった。祖父母と会う頻度については、「1. (ほぼ)毎日」「2. 週1回～数回」「3. 月1回～数回」「4. 年1回～数回」「5. 年1回未満」の5つから選んでもらう形であった。

#### 2.2.2 祖父母の機能

孫一祖父母関係評価尺度<sup>9)</sup>の孫版を使用し、孫（回答者）が中学生の頃までの祖父母の機能について回答してもらった。この尺度では、孫から見た祖父母の機能として「存在受容機能」「日常的・情緒的援助機能」「時間的展望促進機能」「世代継承性促進機能」の4機能が測定される。「存在受容機能」(8項目)は、祖父母がいるだけで孫が安心できたり、困ったときの拠り所になるという内容であり、「悩みや、もめごとがあったときなど、祖父(祖母)が何もしなくてもいるだけで、心の支えになると思う」などの項目がある。「日常的・情緒的援助機能」(6項目)は、祖父母が孫のことを理解しようとしたり、大目にみるという内容であり、「祖父(祖母)はわたしのからだのぐあいを気遣ってくれる」などの項目がある。「時間的展望促進機能」(7項目)は、孫が祖父母の姿を通して、自身に命が引き継がれていく実感を持つといった内容であり、「祖父(祖母)の姿から、人の一生について、積極的に考えてみることもある」

などの項目がある。「世代継承性促進機能」(4項目)は、祖父母の姿から孫が祖父母や両親から引き継いだ類似性を認識する機能であり、「祖父(祖母)は、わたしの知らない親のことを教えてくれる」などの項目がある。回答方法は「3. はい」「2. どちらでもない」「1. いいえ」の3件法であった。

### 2.2.3 祖父母と両親との関係

回答者自身がかつとも影響を受けたと感じている祖父母1名と、大学生自身の両親との関係性について尋ねた。孫自身が中学生の頃までのことを思い出してもらい、「1. その方とあなたのご両親とは関係は、全体としてみた場合、良かったと思いますか?」「2. あなたのご両親は、その方を尊重されていたと思いますか?」「3. その方は、あなたのご両親を尊重されていたと思いますか?」の全3問に回答してもらった。これらの質問内容の考案にあたっては、奥村と久世<sup>22)</sup>を参考にした。1番目の質問は、「1. とても良かったと思う」「2. 良かったと思う」「3. 良かったとは言えないと思う」、2番目と3番目の質問については、「1. とても尊重していたと思う」「2. 尊重していたと思う」「3. 尊重していたとは言えないと思う」のそれぞれ3件法で回答してもらった。

### 2.2.4 自我同一性

エリクソン心理社会的段階目録(第5段階)12項目版<sup>23)</sup>を使用した。この尺度は、エリクソンが考案した心理社会的発達段階の第5段階である青年期の自我同一性を測定するものである。「私は、自分が何になりたいかをはっきりと考えている」など、自我同一性の統合状態を測定する6項目と、「私は人生をどのように生きたいのか決められない」など、自我同一性の混乱状態を測定する6項目の計12項目で構成されている。集計の際は、後者の評定値を逆転させ、高得点であるほど自我同一性が高くなるように得点化される。回答方法は「5. とてもよくあてはまる」「4. かなりあてはまる」「3. あまりあてはまらない」「2. ほとんどあてはまらない」「1. 全くあてはまらない」の5件法であった。

### 2.2.5 自尊感情

日本語訳 Rosenberg Self-Esteem Scale<sup>24)</sup>を使用した。この尺度は、Rosenberg<sup>25)</sup>が作成した自尊感情尺度をバックトランスレーションの手続きを経て日本語訳したものであり、自分自身のことを尊敬できているか、価値ある人間と捉えることができているかについて測定を行う。「私は、自分自身にだいたい満足している」「時々、自分はまったくダメだと思うことがある」「私にはけっこう長所があると感じている」などの全10項目で構成されている。回答方法は「4. 強くそう思う」「3. そう思う」「2. そう

思わない」「1. 強くそう思わない」の4件法であった。

### 2.2.6 高齢者に対するイメージ

高齢者に対するイメージを多面的に捉えることを意図し、奥村と久世<sup>22)</sup>の尺度を使用した。奥村と久世<sup>22)</sup>は、従来より広く用いられてきた保坂と袖井<sup>15)</sup>の尺度を改訂した形容詞対による尺度に加え、具体的な行動レベルでの把握が必要であるという大塚ら<sup>26)</sup>の主張をふまえた、行動上の特徴記述の対で構成された尺度との併用を試みている。本研究でもこれに倣うこととした<sup>†1)</sup>。形容詞対による高齢者イメージは「統合・柔軟性」と「能動性」の下位尺度からなり、前者は「つめたい—あたたかい」「不幸な—幸福な」「憎らしい—愛らしい」「愚かな—賢い」、後者は「弱い—強い」「暇そう—忙しそう」「受動的—能動的」「遅い—速い」などの項目がある。回答方法は7件法である。また、行動特徴の対による高齢者イメージは「円熟性」と「積極性」の下位尺度からなり、前者は「穏やかである—感情の起伏が激しい」「周囲に配慮する—自己中心的である」「落ち着いている—落ち着きがない」、後者は「意欲的である—一意欲的ではない」「物事や周囲への関心が高い—物事や周囲に無関心である」「自立的である—依存적である」などの項目がある。回答方法は6件法である。なお、集計の際には、得点が高いほど各下位尺度名(統合・柔軟性、能動性、円熟性、積極性)が表すイメージが強くなるように逆転処理を行う(以上、項目例を含め奥村と久世<sup>12)</sup>に準じて説明)。従って、「統合・柔軟性」が高いほど「あたたかい、幸福な、愛らしい、賢い」などのイメージが強く、「能動性」が高いほど「強い、忙しそう、能動的、速い」などのイメージが強く、「円熟性」が高いほど「穏やかな、周囲に配慮する、落ち着いている」などのイメージが強く、「積極性」が高いほど「意欲的である、物事や周囲への関心が高い、自立的である」などのイメージが強いことを意味する。本研究ではこれらの尺度を用い、「(あなたの祖父母についてではなく)あなたの全般的な「高齢者に対するイメージ」を教えてください」という教示の下、一般的な高齢者に対して抱いているイメージを回答してもらった。

### 2.2.7 個人属性

回答者の所属学科、学年、年齢、性別をたずねた。

### 2.3 手続き

2019年10月に、講義の前後の時間を利用して質問紙調査を実施した。質問紙を配布し、最初に口頭で調査の趣旨等を説明した。調査に同意した人にはその場で回答を求めた。授業後に、質問紙の記入を終えた人から順に調査票を提出してもらった。調査の

所要時間は10分程度であった。

#### 2.4 倫理的配慮

調査票には、調査は無記名式であること、回答しない場合でも不利益が生じることは一切ないこと、調査結果は研究以外の目的では使用しないことを明記した。調査票の配布時にも、上記の点について改めて口頭で説明した。質問紙上に調査協力の同意を確認する項目を設け、項目への記入をもって同意とみなした。本研究を実施するにあたり、川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得た(承認番号19-071号)。

#### 2.5 分析方法

挙げられた祖父母の属性を確認した後、各尺度の信頼性(Cronbachの $\alpha$ 係数)、平均値、標準偏差を算出した。次に、剰余変数として統制の必要があるかどうかを検討するため、回答者の属性および祖父母の属性による尺度得点の違いを検討した。その後、一部の属性変数を統制した上で、中学卒業までの時期における祖父母の機能と回答者の心理的発達(自我同一性、自尊感情)および高齢者イメージの関係について、偏相関分析と階層的重回帰分析を用いて検討した。

### 3. 結果

#### 3.1 挙げられた祖父母の属性

挙げられた祖父母の属性を表1に示す。「祖父母との同居(現在)」「祖父母と会う頻度(現在)」については、「祖父母との同居(中学卒業まで)」「祖父母と会う頻度(中学卒業まで)」で、「その他」を選んだ人物を除いて集計した。「影響を受けたと感じている人物」は、母方祖母を選んだ人物がもっとも多く、次いで父方祖母を選んだ人物が多かった。父方祖父と母方祖父を選んだ人数はほぼ同じであった。影響を受けた人物の存命は、「元気に暮らしている」と回答した人物がもっとも多かったが、一方で「現在は亡くなっている」との回答も約17%みられた。影響を受けた祖父母との同別居は、中学卒業までは「近居」との回答がもっとも多かったが、現在は「近居」と「遠居」がほぼ同じであった。もっとも影響を受けた祖父母と会う頻度は、中学卒業までは「ほぼ毎日」「週1回～数回」「月1回～数回」の回答がほぼ同じである一方、現在は「年1回～数回」との回答がもっとも多かった。

#### 3.2 尺度の信頼性と記述統計量

Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、行動特性イメージの「積極性」が0.67とやや低かった。しかし、他は0.70以上であったため、許容範囲内であると判断した。そこで、それぞれの尺度を構成している項目の評定値を加算し、各尺度の得点を算出した。表

2に各尺度の信頼性と回答者全体での記述統計量を示す。

#### 3.3 回答者および挙げられた祖父母の属性と尺度得点との関係

回答者の属性、および祖父母の属性による尺度得点の相違について検討した。表1に示した属性変数については、分布に応じて適宜集約をおこなった。この分析の目的は、本研究の焦点である尺度得点間の関係を検証する際に、各種の属性変数を剰余変数として統制すべきかどうかを検討することであった。関連の強いあるいは広範な変数と関連する属性変数がある場合、尺度得点間の関係に対するそれらの影響を考慮することになるためである。

##### 3.3.1 回答者属性との関係

性別(男性、女性)および学年(1年生、2年生以上)による対応のないt検定を、各尺度得点について行った。年齢(18歳、19歳、20歳以上)による違いも検討したが、年齢は学年と強い関連があるため( $\chi^2(2)=138.10, p<.001$ )、後者で代表させることとした。その結果、性別については、ほとんどの尺度で大きな違いはみられず、高齢者イメージの「統合・柔軟性」のみ、女性の方が有意に高得点であった( $t(265)=2.36, p<.05$ )。学年については、「世代継承性促進機能」( $t(265)=2.45, p<.05$ )、「祖父母と両親の関係」( $t(265)=2.62, p<.01$ )、「自我同一性」( $t(265)=2.13, p<.05$ )において、「2年生以上」の方が有意に高得点であった。

##### 3.3.2 挙げられた祖父母の属性との関係

表1に示した属性(もっとも影響を受けた祖父母の種類、存命か否か、同別居(中学卒業以前、現在)、接触頻度(中学卒業以前、現在)の計6属性)について、それぞれ尺度得点との関連を検討した。

もっとも影響を受けた祖父母の種類については、表1に示す4カテゴリー別、および「祖父、祖母」「父方、母方」による違いを検討した。その結果、もっとも多くの変数と関連していたのは「父方、母方」(4変数:「祖父、祖母」のt検定では1変数、4カテゴリー1要因の分散分析では3変数、「祖父、祖母」と「父方、母方」の2要因分散分析での交互作用は1変数のみ)であり、「存在受容機能」( $t(265)=3.15, p<.01$ )、「時間的展望促進機能」( $t(265)=2.50, p<.05$ )、「世代継承性促進機能」( $t(265)=2.65, p<.01$ )、「祖父母と両親との関係性」( $t(265)=4.12, p<.001$ )において、いずれも「母方」の方が有意に高得点であった。

祖父母が存命か否かについて1要因3水準の分散分析を行ったところ、祖父母の機能における「存在受容機能」と「時間的展望促進機能」、および高

表1 挙げられた祖父母の属性

対象者属性	カテゴリー	人数	%
もっとも影響を受けた人	父方祖父	33	12.4
	父方祖母	60	22.5
	母方祖父	40	15.0
	母方祖母	134	50.2
祖父母の存命	元気に暮らしている	194	72.7
	元気とは言えないが、存命である	28	10.5
	現在は亡くなっている	45	16.9
祖父母との同居（中学卒業まで）	同居	52	19.5
	近居（歩いていける，30分～1時間程度）	141	52.8
	遠居（1～2時間程度，それ以上）	67	25.1
	その他	7	2.6
祖父母との同居（現在） ※死別者は除く，N=222.	同居	31	14.0
	近居（歩いていける，30分～1時間程度）	96	43.2
	遠居（1～2時間程度，それ以上）	90	40.5
	その他	5	2.3
祖父母と会う頻度（中学卒業まで）	（ほぼ）毎日	75	28.1
	週1回～数回	71	26.6
	月1回～数回	64	24.0
	年1回～数回	52	19.5
	年1回未満	5	1.9
祖父母と会う頻度（現在）	（ほぼ）毎日	28	12.6
	週1回～数回	19	8.6
	月1回～数回	53	23.9
	年1回～数回	112	50.5
	年1回未満	10	4.5

年齢イメージの「統合・柔軟性」において要因の効果が有意であった（順に  $F(2,264)=4.66, p<.01$ ,  $F(2, 264)=3.30, p<.05$ ,  $F(2,264)=3.21, p<.01$ ). Bonferroniの方法による多重比較では、祖父母の機能の2尺度について、いずれも「現在は亡くなっている」場合の得点が高く、「元気とは言えないが、存命である」場合との間に有意差が認められた。

中学卒業以前および現在における祖父母との同別居および接触頻度の計4変数間には、相互に強い関連性が認められた（同別居については「同居」「近居」「遠居+その他」の3カテゴリー、接触頻度については「年1回未満」を隣接する「年1回～数回」と合わせた4カテゴリーで集計しクロス表を作成したところ、 $\chi^2>88.91\sim 226.59, p<.001$ ；中学卒業以前と現在の状態は関連があり、かつ同居ないし近隣に居住するほど接触頻度が多い）。そして、1要因分散分析の結果これらのうち尺度得点ともっとも多く関連し

ていたのは中学卒業以前における接触頻度であり、Bonferroniの方法による多重比較では「月1回～数回」ないしそれ以上である場合と、「年1回～数回」ないしそれ以下である場合との間に有意差が認められた。そこで、改めて「（ほぼ）毎日+週1回～数回+月1回～数回」と「年1回～数回+年1回未満」の2群を設定してt検定をおこなった。その結果、表3に示すとおり、祖父母の機能における「存在受容機能」、「日常的・情緒的援助機能」、「時間的展望促進機能」および高齢者イメージの「統合・柔軟性」において、接触頻度の多い群の方が有意に高得点であった。

### 3.4 変数間の相関関係

尺度得点相互の相関関係を検討するために、先の分析でもっとも顕著な関係のみられた「中学卒業以前における祖父母との接触頻度」（「毎日+週1回～数回+月1回～数回」を1、「月1回～数回+月1回未満」を0）を統制した偏相関係数を算出した。

その結果、表4に示すとおり、まず「祖父母と両親の関係」は、高齢者イメージ (SD法) の「能動性」を除いたすべての変数と正の相関が認められた。次に、祖父母の機能と現在の心理的発達 (自我同一性、自尊感情) との間には、すべて有意な正の相関が認められた。また、祖父母の機能と高齢者イメージとの関連についても、祖父母の機能の「日常的・情緒的援助機能」と高齢者イメージの「積極性」「能動性」

の間には有意な関連がみられなかったものの、他の変数相互の間にはすべて正の相関が認められた。さらに、祖父母機能の4下位尺度間、心理的発達の「自我同一性」と「自尊感情」の間、および高齢者イメージの4変数間では、いずれも有意な正の相関が認められた。

なお、現在の心理的発達 (自我同一性、自尊感情) と高齢者イメージとの関連については、自我同一性、

表2 各尺度の信頼性と記述統計量

変数	n	$\alpha$ 係数	平均値	標準偏差
祖父母の機能				
存在受容	267	.87	18.06	4.34
日常的・情緒的援助	267	.70	15.73	2.34
時間的展望促進	267	.81	16.92	3.65
世代継承性促進	267	.71	9.07	2.37
祖父母と両親との関係	267	.88	7.15	1.68
心理的発達				
現在の自我同一性	267	.80	37.27	6.85
現在の自尊感情	267	.87	22.98	5.15
高齢者イメージ				
統合・柔軟性	267	.83	29.37	6.36
能動性	267	.77	20.42	5.57
円熟性	267	.86	16.81	4.21
積極性	267	.67	16.12	3.27

表3 中学卒業以前の祖父母との接触頻度による尺度得点の差異

変数	接触頻度	1. 毎日+2. 週1回~数回 +3. 月1回~数回		4. 年1回~数回+ 5. 年1回未満		t値
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
祖父母の機能						
存在受容		18.51	4.15	16.39	4.66	3.34 ***
日常的・情緒的援助		16.04	2.13	14.58	2.69	3.78 ***
時間的展望促進		17.28	3.51	15.60	3.86	3.14 **
世代継承性促進		9.19	2.35	8.63	2.43	1.58
祖父母と両親との関係		7.13	1.61	7.23	1.93	0.34
心理的発達						
現在の自我同一性		37.49	6.42	36.49	8.26	0.84
現在の自尊感情		23.07	4.98	22.65	5.76	0.55
高齢者イメージ						
統合・柔軟性		30.22	6.27	26.25	5.75	4.32 ***
能動性		20.59	5.26	19.79	6.62	0.84
円熟性		17.10	4.11	15.74	4.43	2.18 *
積極性		16.31	3.15	15.42	3.63	1.83

\*\*\* p&lt;.001, \*\* p&lt;.01, \* p&lt;.05, † p&lt;.10

自尊感情ともに、高齢者イメージの「円熟性」「統合・柔軟性」とは正の相関が認められた。一方で、高齢者イメージの「積極性」「能動性」との間には有意な関連が認められなかった。

### 3.5 祖父母の機能が心理的発達および高齢者イメージに与える影響

中学卒業までの時期における祖父母の機能が、現在は大学生である孫の心理的発達（自我同一性、自尊感情）および高齢者イメージに与える相対的な影響について検討するために、階層的重回帰分析を行った。まず第1ステップで、尺度得点との関連が最も顕著であった「中学卒業までの祖父母との接触頻度」および偏相関分析で多くの変数と関連していた「祖父母と両親の関係」を投入し、その後、第2ステップで4つの祖父母機能を投入した<sup>†2)</sup>。なお、各独立変数の影響力については、最終的な重回帰式での標準偏回帰係数によって評価した。これによって、祖父母の機能が第1ステップで投入した変数の影響とは独立に有意な影響を及ぼしているかどうかを確認した上で、従属変数に対する4つの祖父母機能の相対的な影響力について検討した。

#### 3.5.1 心理的発達（自我同一性、自尊感情）に対する影響

分析結果を表5に示す。自我同一性、自尊感情ともに、第2ステップで祖父母機能を投入したときのR<sup>2</sup>の増加量は有意であり、祖父母の機能は「中学生の頃までの接触頻度」「祖父母と両親の関係」と

は独立の影響を及ぼしていた。祖父母の4機能の中では、「時間的展望促進機能」が、自我同一性に対しては10%水準の有意傾向で、自尊感情に対しては5%水準で正の影響を及ぼしていた。

#### 3.5.2 高齢者イメージに対する影響

分析結果を表6に示す。第2ステップで祖父母機能を投入したときのR<sup>2</sup>の増加量は、「積極性」では有意ではなかったが、「統合・柔軟性」「能動性」「円熟性」において有意であり、「中学生の頃までの接触頻度」「祖父母と両親の関係」とは独立の影響を及ぼしていた。祖父母の4機能の中では、「時間的展望促進機能」が高齢者イメージの「統合・柔軟性」と「円熟性」に対して5%水準で正の影響を及ぼしていた。また、「存在受容機能」が「統合・柔軟性」に対しては10%水準の有意傾向で、「能動性」に対しては5%水準で正の影響を及ぼしていた。加えて「世代継承性促進機能」が「能動性」に対して10%水準の有意傾向で正の影響を及ぼしていた。

## 4. 考察

本研究では、大学生に自身の成長にもっとも影響を受けたと感じている祖父母を1名挙げさせ、その祖父母と自身の中学校卒業以前における関わり（祖父母の機能）が、現在の大学生自身の心理的発達（自我同一性、自尊感情）と一般的な高齢者イメージにどのような影響を及ぼしているのか明らかにすることを目的とした。そこには、「もっとも影響を受け

表4 変数間の相関関係（「中学卒業までの祖父母と会う頻度」を統制した偏相関係数）

変数	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	
祖父母の機能											
存在受容	①	—									
日常的・情緒的援助	②	.63***	—								
時間的展望促進	③	.68***	.49***	—							
世代継承性促進	④	.55***	.43***	.53***	—						
祖父母と両親との関係	⑤	.51***	.31***	.39***	.37***	—					
心理的発達											
現在の自我同一性	⑥	.19**	.16*	.23***	.20***	.17**	—				
現在の自尊感情	⑦	.26***	.16**	.27***	.19**	.19**	.67***	—			
高齢者イメージ											
統合・柔軟性	⑧	.36***	.20***	.35***	.25***	.32***	.17**	.17**	—		
能動性	⑨	.15*	.04	.12 <sup>†</sup>	.15**	-.01	.05	.05	.39***	—	
円熟性	⑩	.28***	.15*	.30***	.20***	.33***	.21***	.15*	.67***	.25***	
積極性	⑪	.15*	.06	.15*	.17**	.18**	.01	.07	.20***	.27***	.22***

\*\*\* p<.001, \*\* p<.01, \* p<.05, † p<.10



表5 祖父母の機能と自我同一性、自尊感情の関連

独立変数	従属変数	自我同一性			自尊感情		
		$\Delta R^2$	b	$\beta$	$\Delta R^2$	b	$\beta$
(ステップ1)		.03**			.04**		
	中学生の頃までの接触頻度		-0.33	-.02		0.21	.02
	祖父母と両親との関係		0.34	.08		0.21	.07
(ステップ2)		.04*			.05**		
	存在受容		-0.05	-.03		0.14	.12
	日常的・情緒的援助		0.11	.04		-0.05	-.02
	時間的展望促進		0.30	.16 <sup>†</sup>		0.24	.17*
	世代継承性促進		0.25	.09		0.05	.02
R <sup>2</sup>		.07**			.09***		

\*\*\* p<.001, \*\* p<.01, \* p<.05, † p<.10

表6 祖父母の機能と高齢者イメージの関連

独立変数	従属変数	統合・柔軟性			能動性			円熟性			積極性		
		$\Delta R^2$	b	$\beta$	$\Delta R^2$	b	$\beta$	$\Delta R^2$	b	$\beta$	$\Delta R^2$	b	$\beta$
(ステップ1)		.16***			.004			.12***			.05**		
	中学生の頃までの接触頻度		-3.21	-.21***		-0.37	-.03		-1.05	-.10		-0.83	-.11 <sup>†</sup>
	祖父母と両親との関係		0.65	.17***		-0.44	-.13 <sup>†</sup>		0.60	.24***		0.24	.12 <sup>†</sup>
(ステップ2)		.06***			.05*			.04*			.02		
	存在受容		0.24	.17 <sup>†</sup>		0.27	.21*		0.06	.06		0.04	.05
	日常的・情緒的援助		-0.16	-.06		-0.27	-.11		-0.10	-.05		-0.11	-.08
	時間的展望促進		0.30	.17*		0.02	.02		0.23	.20*		0.04	.05
	世代継承性促進		0.06	.02		0.31	.13 <sup>†</sup>		-0.01	-.01		0.14	.10
R <sup>2</sup>		.23***			.05*			.15***			.06*		

\*\*\* p<.001, \*\* p<.01, \* p<.05, † p<.10

た祖父母」「過去の祖父母機能と現在の心理的発達の関係」「過去の祖父母機能と現在の一般的な高齢者イメージとの関係」という3つの視点が含まれる。以下、それぞれについて考察する。

#### 4.1 もっとも影響を受けた祖父母について

回答者が「もっとも影響を受けた祖父母」として挙げた人物は、母方祖母、父方祖母、母方祖父、父方祖父の順であり、母方祖母を選んだ回答者が全体の約半数と多かった。これは先行研究と符合する結果である。森下と上田<sup>10)</sup>、奥村と久世<sup>22)</sup>においても同様に大学生を対象としてもっともかわりのある祖父母がたずねられているが、やはり祖母（特に母方）を選んだ人物が一番多かった。祖母を選ぶ人が多い理由について、前原ら<sup>20)</sup>は、祖母は孫に対し、料理を作る、身の回りの世話をする、生活の知恵を教えるといった「伝統的女性役割機能」に加え、孫の安全基地になる、社会生活の知識・習慣を教えるなど、孫の世話において多くの役割を果たしているために、影響を受けた人物として祖母を選ぶ孫が多

くなるのではないかと指摘している。

回答者の中には、「もっとも影響を受けた祖父母」として、すでに亡くなっている人物を選んだ者も一定数存在した。これは福江ら<sup>21)</sup>の結果と同様である。福江ら<sup>21)</sup>が述べているように、祖父母が既に亡くなっている人は、祖父母が存命である人と比較して、亡くなった祖父母のことを思い浮かべながら、命の大切さ、自身の生き方等について考える機会があると考えられる。そのため、祖父母はたとえ亡くなったとしても、その後の孫に影響を及ぼし続ける可能性がある。

祖父母との接触について、中学卒業以前と比較すると、大学生である現在の方が祖父母と会う頻度が減少し、同居率も低下している。大学生になると親元を離れて生活する人が増え、祖父母の加齢ともあいまって、交流頻度が減少していくと考えられる。

#### 4.2 過去の祖父母機能と現在の心理的発達との関係

相関分析（表4）でみられた有意な関連性の多く

が階層的重回帰分析(表5)において有意ではなくなっていたが、しかし「時間的展望促進機能」については、なおも自我同一性、自尊感情の両方と有意ないし有意傾向の関連を示した。「時間的展望促進機能」尺度の中には、「祖父(祖母)の姿から、人の一生について、積極的に考えてみることもある」「祖父(祖母)の姿から、人の死について考えてみることもある」などの項目がある。渡辺<sup>27)</sup>は、祖父母が孫に果たす機能について、年齢的に困難な人生の終末を生きるモデルを提供することで、孫自身の人生の展望形成を促すと述べている。また森下と上田<sup>10)</sup>は、孫は祖父母から話を聞くことによって、広い視点や時間的展望のもとで自分自身をとらえ、祖父母からの受容や理解共感に支えられ自尊感情を高めるのではないかと述べている。本研究の結果は、このような先行研究における考察の妥当性を示唆するものであり、孫が祖父母の姿を見たり話を聞いたたりしながら自身の今後について考えていくことが、自我同一性や自尊感情の形成に繋がると考えられる。

なお、現代は核家族が増加しており、祖父母と比較すると両親から影響を受ける人の方が多いと考えられる。しかし、關戸<sup>28)</sup>が指摘するように、社会化の過程にある子どもたちにとっては、祖父母もまた大人としてのモデルになり得る。とくに本研究の重回帰分析では、祖父母と両親との関係を統制したうえで、「時間的展望促進機能」の有益な役割が見いだされた。「時間的展望促進機能」の意義は「継続性」をアイデンティティの中核とみなす Baranowski<sup>6)</sup>の指摘とも整合するものであり、孫の発達という観点から祖父母が果たす役割の中心的な部分として、核家族化の進んだ現代でもなお、一定の重要性を持ち続けていると考えられる。

なお、自我同一性と自尊感情のいずれも、最終的な重回帰式において有意ないし有意傾向であったのは祖父母機能の「時間的展望促進機能」のみであり、他の祖父母機能、そして統制変数とした接触頻度および祖父母と両親の関係は、いずれも有意な影響を示さなかった。おそらく、これらの変数は、それぞれの時点(祖父母と会っている時、祖父母から自分が受け入れられていると感じる時、祖父母に助けられている時など)では、孫にとって肯定的な影響を与えていると思われる。本研究では過去の祖父母との関わりが大学生の現在にまで影響しているかどうかに着目しており、その中でもっとも重要なのが「時間的展望促進機能」であると考えられる。

#### 4.3 過去の祖父母機能と現在の一般的な高齢者イメージとの関係

心理的発達に対するものと同様、相関分析(表4)

では「統合・柔軟性」「円熟性」を中心に多くの有意な関連性がみられたが、階層的重回帰分析(表5)では有意でなくなったものもみられた。しかし、高齢者イメージに対しても、「時間的展望促進機能」は上記2つの変数に対して有意な寄与を示した。また、「存在受容機能」が「能動性」と有意な、また「統合・柔軟性」と有意傾向の関連性が認められた。

本研究で用いた高齢者イメージの指標はいずれも高得点であるほど肯定的なイメージであることを意味しており、正の標準偏回帰係数は、思春期以前に祖父母がこれらの機能を果たしてくれていたことによって、その後の一般的な高齢者イメージが肯定的になることを示唆する。特に「統合・柔軟性」や「円熟性」は、これらが「あたたかい、幸福な、愛らしい、賢い」「穏やかな、周囲に配慮する、落ち着いている」などの特徴をもつが故に、周囲の他者との温和な関係を構築するのに貢献すると考えられ、若年者にとって異世代である高齢者との交流をより容易にしてくれる可能性がある。

江口<sup>5)</sup>は、一般的に祖父母は、常に変化している孫の成長や親世代の成長を可視化しながら、祖父母自身も健康や生活に変化があることに迷い悩みながら、孫という新しい世代に支えられ、祖父母世代であっても成長し続けることが可能である、と述べている。良好な高齢者イメージを背景として孫世代が高齢者と関わりを持つことは、高齢者の well-being にとって良い影響をもたらすと考えられる。

なお、高齢者イメージと有意な関係を示した「存在受容機能」と「時間的展望促進機能」については、その高さ自体の結果についても触れておくべきであるかもしれない。すなわち、これらの祖父母機能は属性変数との関連において、調査時点で回答者が死別している(にもかかわらずもっとも影響のあった)祖父母の方がむしろ高得点であった。

本研究では死別の時期や状況の詳細を特定していないが、しかし回答者が自身のこれまでの人生のどこかで大切な祖父母の死を経験したことは確かであろう。先述の渡辺<sup>27)</sup>が示唆するように、「年齢的に困難な人生の終末を生きた」祖父母の存在を認識することは、その後の高齢者イメージを左右する可能性をもつことが示唆される。

最後に付言して、表6に示されているとおり、高齢者イメージに対しては、統制変数として扱った「祖父母と両親との関係」がいずれの分析でも最終的な重回帰式において有意ないし有意傾向の寄与を示した。また、中学校卒業以前の接触頻度もまた、「統合・柔軟性」において有意、「積極性」で有意傾向の寄与を示した。奥村と久世<sup>22)</sup>は、他世代とのより親密

な交流を経験していることや思いやりのある態度に身近にふれて育つことによって、高齢者に対して肯定的な感情をもてるようになる可能性を高めると述べており、本研究の結果はこのような指摘と符合する。

しかし、ここでもなお、これらの変数を統制した上で「祖父母がかつて果たしてくれた機能」が良好な高齢者イメージに寄与していたことは、強調されるべきであると思われる。表1に示されているように、大学生においては幼少期と比べて祖父母との接触頻度は低下しており、本研究の場合、祖父母が存命であっても接触頻度が「年1回～数回」ないしそれ以下の人が5割を超えている。このように、祖父母との接触が全般的に乏しい大学生のもつ一般的な高齢者イメージが過去の祖父母機能によって左右され得ることを、本研究の結果は示唆しているからである。

#### 4.4 おわりに——本研究の結論と課題

本研究の結果、孫が中学校卒業以前の祖父母の果たす機能は、その後の心理的発達（自我同一性、自尊感情）および高齢者イメージに影響を与えていた。核家族化が進み父母との関係が希薄となりがちな現代においても、祖父母の存在や祖父母が独自に果たすことのできる役割は、孫の心理的発達や肯定的な

高齢者イメージの形成において有意義であるといえる。

ただし、本研究には方法論の点で改善の余地があると考えられる。たとえば、祖父母の機能を測定するために使用した「孫—祖父母関係評価尺度」の4機能は相互に高い相関を示しており、各機能の弁別性という点では明瞭であるとは言い難い。今後改めて、祖父母の機能に関する尺度構成の検討を行っていく必要があると考えられる。また、本研究では「もっとも影響を受けた祖父母1名」の機能に絞って検討し、他の祖父母の存在を考慮しなかった。また「もっとも影響を受けた祖父母」の種類別による検討もおこなっていない。本研究の分析対象者は267名であったが、より多くの対象者を確保することで、他の祖父母についても考慮した分析や、もっとも影響を受けた祖父母の種類による影響の違いに着目した分析も可能になるであろう。さらに、本研究では過去の祖父母機能に注目して「中学校卒業以前」について回顧報告を求めたが、これによって当時の状況を適切に反映する回答が得られたか、また「中学校卒業以前」という時期の設定が妥当であったかどうかについて、本研究の結果のみで明確な主張をおこなうことはできない。追試的な取り組みを含め、今後の研究の蓄積が必要である。

#### 注

- †1) 奥村と久世<sup>22)</sup>は、尺度作成時には従来型の形容詞対による把握を「SD法」によるイメージ、行動レベルの把握を「行動特性イメージ」と称している。ただし、それぞれにおける因子抽出後の他変数との関連の検討においては、これらの呼称に依らず下位尺度名のみで記述している。「SD法」は「行動特性」と異なり本来は測定手法の名称であることもふまえ、本稿では必要に応じて前者を「形容詞対」、後者を「行動特徴（または行動上の特徴記述）の対」によるイメージと称しつつ、結果の提示および解釈にあたっては下位尺度の内容を優先して記述する。
- †2) 祖父母の4機能については階層性が想定されていないため、複数の階層を設定せず一括で重回帰式に投入した。

#### 付 記

本研究の遂行にあたり、利益相反関係にある企業等はありません。

#### 謝 辞

調査の実施にあたり御配慮を下された諸先生方、調査票への回答に御協力下さいました多くの大学生の皆様、深く感謝申し上げます。また、各尺度の使用についてご許可をいただきました原著者の先生方にも、改めて御礼申し上げます。なお、本研究は第一筆者による令和元年度川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科臨床心理学専攻に提出した修士学位論文にもとづくものであり、岡山心理学会第67回大会（2019年12月）において発表されています。

#### 文 献

- 1) 内閣府：令和元年版高齢社会白書（全体版）（PDF版）。  
[https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/01pdf\\_index.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/01pdf_index.html), 2019. (2019.10.22 確認)
- 2) 諏澤宏恵：祖父母役割の取得過程—孫世代、親世代の相補的調整を通して—。人間文化研究年報, (27), 115-124, 2011.

- 3) 深瀬裕子, 岡本祐子: 中年期から老年期に至る世代継承性の変容. 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部 教育人間科学関連領域, (59), 145-152, 2010.
- 4) 厚生労働省: 平成15年版厚生労働白書—活力ある高齢者像と世代間の新たな関係の構築—. <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/03/>, 2003. (2019.4.23確認)
- 5) 江口千代: 親世代を支援する祖父母の「孫育て」—概念分析—. 日本看護福祉学会誌, 21(2), 99-111, 2016.
- 6) Baranowski MD: Grandparent-adolescent relations: Beyond the nuclear family. *Adolescence*, 17, 575-584, 1982.
- 7) Erikson EH: *Identity and the life cycle*. International Universities Press, New York, 1959.
- 8) Mead M: Grandparents as educators. In Leichter HJ ed, *The family as educator*, Teachers College Press, New York, 66-75, 1974.
- 9) 田畑治, 星野和実, 佐藤朗子, 坪井さとみ, 橋本剛, 遠藤英俊: 青年期における孫・祖父母関係評価尺度の作成. 心理学研究, 67(5), 375-381, 1996.
- 10) 森下正康, 上田佳乃: 祖父母との関係が女子大学生の自尊感情と自己受容に与える影響. 京都女子大学発達教育学部紀要, (12), 135-144, 2016.
- 11) 厚生省: 平成12年版厚生白書—新しい高齢者像を求めて—. 東洋経済新報社, 東京, 2000.
- 12) Koyano W: Japanese attitudes toward the elderly: A review of research findings. *Journal of Cross-Cultural Gerontology*, 4, 335-345, 1989.
- 13) Palmore E: Facts on ageing: A short quiz. *The Gerontologist*, 17, 131-137, 1977.
- 14) 大谷英子, 松木光子: 老人イメージと形成要因に関する調査研究—(1)大学生の老人イメージと生活経験の関連—. 日本看護研究学会雑誌, 18(4), 25-38, 1995.
- 15) 保坂久美子, 袖井孝子: 大学生の老人イメージ—SD法による分析—. 社会老年学, (27), 22-33, 1988.
- 16) 奥村由美子, 久世淳子: 大学生の高齢者イメージに関連する要因—認知症高齢者と健常高齢者のイメージの比較—. 日本福祉大学健康科学論集, 12, 31-38, 2009.
- 17) 鈴木宏幸, 小川将: 大学生が抱く高齢者イメージの心像性と祖父母との被支援的接触頻度の関連. 日本世代間交流学会誌, 4(1), 55-60, 2014.
- 18) 久世淳子: 青年(学生)の高齢者イメージに関する一考察. 日本福祉大学情報社会科学論集, 1, 9-12, 1997.
- 19) 松山礼子, 安永正史, 草野篤子: 大学生の高齢者イメージ—児童期以前における祖父母との交流頻度を通して—. 日本世代間交流学会誌, 4(1), 117-122, 2014.
- 20) 前原武子, 稲谷ふみ枝, 金城育子: 大学生が認知する祖父母役割. 琉球大学教育学部紀要第一部・第二部, (54), 461-467, 1999.
- 21) 福江里美, 福岡欣治, 荒井佐和子: 大学生の孫からみた祖父母の機能と祖父母イメージ. 川崎医療福祉学会誌, 29(1), 191-200, 2019.
- 22) 奥村由美子, 久世淳子: 講義による高齢者イメージの変化—発達過程における他世代とのかかわり経験との関連—. 帝塚山大学心理学部紀要, (5), 1-9, 2016.
- 23) 畑野快, 杉村和美, 中間玲子, 溝上慎一, 都筑学: エリクソン心理社会的段階目録(第5段階)12項目版の作成. 心理学研究, 85(5), 482-487, 2014.
- 24) Mimura C and Griffiths P: A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *Journal of Psychosomatic Research*, 62(5), 589-594, 2007.
- 25) Rosenberg M: *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press, Princeton, 1965.
- 26) 大塚邦子, 正野逸子, 日浦瑞枝, 白井由里子: 看護学生の老人のイメージに関する研究: SD法によるイメージ評価と描画特徴とを中心に. 老年看護学, 4(1), 98-104, 1999.
- 27) 渡辺由己: 大学生の孫による, 祖父母との関わりに関する研究. 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要, (13), 115-122, 2008.
- 28) 關戸啓子: 祖父母との人間関係が大学生の自己受容と対人態度に及ぼす影響. 川崎医療福祉学会誌, 11(1), 49-55, 2001.

(令和2年7月21日受理)

## Effects of Past Grandparent's Functions on Psychological Development and Images of the Elderly in Undergraduate Students

Satomi FUKUE, Yoshiharu FUKUOKA and Sawako ARAI

(Accepted Jul. 21, 2020)

**Key words** : functions of grandparents, time perspectives, grandchildren, late adolescence, images of elderly people

### Abstract

This study investigated the effects of grandparents' functions on their grandchildren's development. 267 undergraduate students participated the questionnaire survey. Participants nominated the most important grandparent to their development and responded to the questions about frequencies of contact with the grandparent until graduating junior high school and in the present, perceived functions by the grandparent and the relationship between their parents and the grandparent until graduating junior high school, ego-identity and self-esteem as their psychological development, and the general image of elderly people. The contact frequency and the parent-grandparent relationship until graduating junior high school were controlled in the following analyses because these were related significantly with many variables of psychological development and images of the elderly. A series of hierarchical multiple regression analyses showed that the grandparent's function of "time perspective" had positive effects on ego identity, self-esteem, and "maturity" and "integrity and flexibility" of image of the elderly and that the grandparent's function of "acceptance of existence" had positive effects on "integrity and flexibility" and "activity" of images of the elderly. These results suggest the possibility of the positive effects of past grandparent's functions until graduating junior high school both on psychological development and on the general image of elderly people in undergraduate students.

Correspondence to : Yoshiharu FUKUOKA

Department of Clinical Psychology

Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193 Japan

E-mail : [fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.30, No.1, 2020 95 – 107)